

森塚敏 追悼 青年座



式辞

私は今日の葬儀につきましての式辞を申しのべる所ですが、弔意の思いがたく、その点、おゆるしいただきたいと思えます。

今、こうしてこの場に立つてみると、語り得なかったことがあまりに多いことに気がつきます。「いつまでもあると思うな親と金」と申しますが、青年座創立十周年の翌年製作部に入った私は、得体の知れない集団に取り込まれながら、その中心に座る人物が森塚敏という男であることを知り、私のふれたことのない一種いいがたい魅力を感じました。その人との別れなど考えもしませんでした。この下北沢時代のある日、敏さんの前で大きなタクアンのしっぽをつかみ丸ごと一本食べました。敏さんが自称漬物撲滅運動家とはつゆ知らず。その時の表情を忘れません。十五歳年長の創立者に向って「敏さん」と言っってはばかれない。こんな関係があるでしょうか。

劇団が代々木八幡に移る時、現状維持か拡大か、大論争があり、敏さんは青年座劇場を持つ今日の拠点を作り上げることに賭けました。そこで「演劇センター構想」をかかげ、人材養成事業をしなやかな精神と遊び心をもった豊かな気持ちで実行。また演劇界の多くの公的な仕事にもたずさわりました。そして何といつても生涯現役役者を貫いた敏さんはいつしか劇団はもとより外部出演においても「座長」と言われ、若い芸術家との交流を心から楽しんでおりました。思えば十代を海軍兵学校で過ごし、敗戦

によって全てがゼロに帰し、その中から、役者を志し俳優座に入り、青年座を創立して、五十数年。敏さんの一生は日本の戦後六十年の一つの姿であったと思えます。

昨年の夏、敏さんは、次代の青年座をどうすべきかを考え、行動を起こしました。有限会社劇団青年座と青年座映画放送株式会社が一致共同して青年座のかじをとる、その新体制として最初の総会を先月六月十五日に行うことになりました。が病床に伏しており、総会の前日、私が病院を訪ね報告と確認を求めますと、さっと右手を上げ、力強いOKサインを下さいました。そして五日後六月十九日、七十九才の生涯を閉じました。

余人をもつて代えがたい座長をなくし、突然自失の思いです。しかし私達は七月二日第一八四回の本公演を青年座劇場で打上げました。そして、今日ここに全国の演劇にかかわる仲間の皆様とともにお別れをしています。劇場には青年座が創り上げてきた芝居とその人物がすみついています。敏さん、彼等と一緒に、私達をいつまでも見守って下さい。

さよなら敏さん、ありがとうございます座長、やすらかにー！

本日はお忙しい中、かくもたくさんの方々に故座長森塚敏・青年座葬の御会葬をいただき心より御礼申し上げます。ありがとうございます。

二〇〇六年七月七日

葬儀委員長 水谷内助義(式辞)

石井美保子

弔辞

東恵美子

生命は大切だ。生命を大切に。そんなこと何千回何万回いわれるより「君が大切だ」といわれたらそれだけで生きていける。大好きなこの言葉を敏におくったのは、六月六日のことでした。そして私はアメリカへ。アメリカのコーネル大学のキャンパス、そしてセントラルパークの美しい榆の木や檜の木の下に南の骨をうめて、二十日帰国して、敏の死を知ったのです。

今年に入ってあなたは、まるで自分の死を予知しているかのように、私や西島大、そして製作の水谷内にこれからの青年座について相談していました。せっかちの私がそんなに心配ならいっせ解散したらどうというとは、真顔で、折角これまでになつた青年座を何とか続けていきたいといっていました。彼の中には、自分が選んだ新しい役員たちへの強い期待と願望があったと思ひ私たちは同意しました。そのあと彼は私に、ぼくは会長になるからあづは副会長になつてほしい、そして西島大は相談役にと。一昨年青年座が五十年を迎えられたのは我が座には特別らしい人がいなかったからだと常々私は思っていました。しかし外部の方たちから青年座のアットホームな雰囲気、「入りたい」と何度いわれたことでしょうか。それもこれも敏のあたたかな人柄、ジェントルマンらしさ、はにかみや、そして頭脳明晰さのなせるわざだと私は思います。無二のよき相談相手だった金井彰久を失い、それでも敏はがんばってくれました。

個人的にいわせてもらえばいつも私をかしい、こんなことあづは出来るかなとか、私がかまがったセリフをいっても、そのままいついつかばってくれる人でした。同志であり、親友であり、年下なのに兄のような存在だった敏。死ぬまで、青年座の将来を心配していた敏、彼がえらんだ新しい役員の方たち、そしてどんどんたくましく上手になつていく青年座の皆さん！やすらかに敏がねむれるよう健康に留意して、よい芝居をつづけて下さい。

千津子お姉さんが、私が書いた好きなことばを敏のお棺の中に入れて下さったことは私にとつて何よりのよろこびです。

敏、さようなら、ゆつくり休んで下さいね。

弔辞

日本テレビ放送網株式会社
代表取締役 取締役会議議長
氏家齊一郎

敏ちゃん、君と俺とは昭和八年、中野区の桃園第三小学校に入学した仲だった。当時ヨーロッパではヒットラーが政権をようやく獲得し、戦雲が漂い始めた時代だった。もとより我々はそれを知る由もなかった。君は一組、私は三組だったが組を越えてよく付き合った。君のあたたかい人柄はその頃から芽生えていたと思う。卒業後、君は海軍士官を志して瀬戸内海の江田島にあった海軍兵学校に行かれた。私は東京で高等学校に行つたために、それからは相まみえることはなかったけれども、その中でお互いの立場立場で、激しい戦争の悲劇を体感した。我々のティーンエイジは戦争の悲劇を体感した時代だったと思う。戦後君は志を立てて俳優座養成所の第一期生となつ

た。私の家内、高橋眞子がちょうど俳優座でお世話になっていたので、いつの頃からか又、敏ちゃん、氏ちゃんという付き合いを始めるようになった。その君は同士と語らつて青年座を結成することになった。私は当時新聞記者をやつていたので、当然のことのように青年座の広報、宣伝を各新聞社に働きかける役割を引き受けた。当時はまだテレビもない時代だった。今その時の創立メンバーで残っているのは東恵美子さんただ一人だと思つと、時の、時間の冷酷な一面を思わざるを得ない。君はその後、飄々とした人柄と、ものに拘らないあたたかさで人々の信用を獲得して座長になつた。まことに名座長だつたと思う。十二年

前、青年座創設四十周年記念を浅草の花やしきでやったことがある。その際、君に頼まれて私は挨拶をさせていただいた。その頃私は日本テレビの社長をやつていた。その時私は今日はテレビ屋のオヤジとして来た訳ではない。敏ちゃんたちの創設を陰から支えた、いわば陰の創設者の一人として来たんだ。というご挨拶をしたのを憶えています。越えて去年の夏、敏ちゃんから家内へ電話があつて、新宿の新国立劇場の小ホールで「ノイズズ・オフ」という演劇をやるんで是非観て貰いたい。これには氏家も連れてきてくれという話だった。私はその伝言を聞いた時にピンと来るものがあつた。そこでそれまでの全ての予定をキャンセルしてその芝居を見に行くことにした。飄々とした演技、胸の悪いにも関わらず堂々とした発声。私は感心した。その後舞台が終つた後、楽屋で歓談した。非常に暖

かい雰囲気だった。しかしその日は七月七日。私はまさか一年後の七月七日、君の前で弔辞を上げるとは予想もしていなかった。敏ちゃん、君は僕の竹馬の友だ。利益の友でも、仕事の友でも、ましてや酒色の友でもない、竹馬の友だ。何年別れていようと手を上げて「やあ、どうしてる」と言えは、全て胸襟を開くことが出来る友人だった。今失つて、無限の悲しさに浸つている。敏ちゃん、どうかやすらかに眠つてくれたまえ。

弔辞

社団法人日本劇団協議会専務理事
劇団一跡二跡代表
古城十忍

残念です。森塚さん、残念で、無念でなりません。劇団協議会会長の任期はまだ一年も残つてるんですよ。どうして逝つちやつたんですか？自分だけさつさと会長職を降りてしまうなんて卑怯です。ズルいですよ。一九九九年のちょうど今頃でしたな。

僕は森塚さんから、THEATER/TOPSの喫茶店に呼び出され、専務理事を引き受けて欲しいと頼まれました。いやいや僕なんて若輩で、何の力もなくて言う僕に、「責任は俺が取るから」、森塚さんはびしつと言いました。青年座の座長にそんなこと言われて、断る勇氣なんてありません。あれは軽い脅しです。恫喝されて、僕は専務理事になつたようなものです。

あれから七年。「これからは若い人だよ。人材養成に力を入れなきゃいかんよ」その森塚さんの言葉を旗印に、劇団協議会の事業は少しずつ根を張るようになつた。

お別れ

全国演劇鑑賞団体連絡会議 事務局長
関昭三

森塚敏さんが逝ってしまつた。あの日、いつものように朝食をとりながら新聞を読んでいると、予期せぬ文字が飛び込んできたのです。森塚さんの訃報を知らせる告知でした。「昨夜」という文字に、かすかな疑いと、そんなはずはないという思いで劇団に電話をしたのでした。

あまりにも突然でした。実は、森塚さんには十日ほど前に開かれた、私ども演鑑連の「全国研究会」で、講演をお願いしておりました。これまで新劇団と共に歩んできた私たちの「演劇鑑賞運動」を確かめる意味で、その歴史を刻んでこられた新劇俳優の先輩という立場でのお話しを伺う運びになっていたのです。しかし、五月にはいつて「暑いのが苦手、一時間の講演は自信がない」と急遽、降板されたのでした。

あらためて考えてみると、その断りの連絡を下さった水谷内さんの一言一言が尋常ではなかったことに思いあたるので。なにしろ、「鑑賞運動が新劇団と共に」を語れる俳優としては森塚敏さんが適任と推挙されたのは水谷内さんでした。断わざるを得なかった体調の状況は「悔しそうな、残念がった」響きから、推測できたはずでした。でも、細身の森塚さんにお会いする時は、いつも笑みをたたえて「大丈夫、まあまあですよ」と言葉を交わしながらも、舞台上上がった森塚さんは、飄々として、なんともいえない間をもった独特な存在感で、私たち観客の心を和ませ、ひきつけてくれた

ただに「体力は大丈夫かな」と心配しながらも、あのご様子が森塚さんらしさと納得していたのです。

森塚さんの舞台は、劇団の六〇年代の関西労演を中心とする例会づくりを経て、青年座の舞台として全国の鑑賞会の例会を席巻したのが一九七三年の「写楽考」の舞台でした。そこで演じられた蔦屋重三郎役の森塚さんの舞台は強烈でした。今でもそのおかしみをもった森塚さんの姿が思い起こされます。以後、数多くの舞台を生み出し全国に届け、私たちの例会をすばらしいものにして下さいました。

切望して川崎のみとなって、一度は諦めかけた舞台を森塚さんの一声で迎えることができた「黄昏」の舞台は、いつまでも忘れられない風景として心に刻み込まれています。森塚さん最後の舞台となった、昨年十二月の「パートタイマー・秋子」は、神奈川県下の鑑賞会の例会を成功に導いてくれました。「八百久さん」役で登場した森塚さんは、期待どおり私たちを和ませ、感動さえ創ってくれました。風邪気味で遠慮されるかもと心配されていた横浜での「旅・初日祝い」にも顔を出し、杯を交わし交流してくれた姿が忘れられません。

口数は少なくても、いつも笑顔で私たちを励ましてくれた森塚さん。お酒が好きで、宴席が好きで、いつも観客との触れ合いを大切にしていた森塚さん。
「パートタイマー・秋子」の舞台は続きますが、そこに森塚さんの姿がないのは寂しい限りです。でも、そこに私たちは、森塚さんの面影を見つめるはずですよ。

ワークショップも新人育成の公演も、ようやく定着してきました。だからこそ、今後の成果を見届けてもらうためにも、いつまでも森塚さんに会長でいてほしかった。

でもホントは会長の任期がまだ一年も残つてるとか、そんなことはどうでもいいんです。もっと生きてほしかった。もっと舞台をやつてほしかった。

板の上で悠然と生きている姿を見せてほしかった。

そして、もっともっと、「やつぱ、芝居は面白いやねえ」と語り合いたかった。

森塚さんまだまだ僕は、僕らは若輩です。今もって大した力もありませんが、森塚さんの意思はしっかり受け継いで行こうと思

います。

見守つていてください。

見守つて、ときに「何やつてんだ、おめえら」とぼやいてください。「もっと、しっかりやんなきゃよ」と叱咤激励してください。

森塚さんの愛してやまなかった芝居が、演劇が、もっともっと多くの人に愛されるものになるよう、微力ながらこれからも頑張ります。

森塚さん、お疲れさまでした。ありがとうございます。

ありがとうございました。

本当にありがとうございます。

弔辞

日本新劇俳優協会会長
北村和夫

良き友森塚敏さん。

突然の訃報に私はただただ驚きをかくすことが出来ませんでした。三月の総会には最後まで残られ、会員の人達とごやかに

団らんをしておられたのに残念でなりません。協会創立五十周年を目前にして、その記念誌作成と記念パーティの準備万端を整えられたまま、貴方は帰らぬ人となりました。九年前の春、杉村春子会長亡き後、会長になれといわれ、今日迄貴方に支えられて会長を務めて参りました。協会発足以来、先輩諸氏の夢を実現するため、貴方は豊かな才能と優しさ溢れる人柄で新劇界のみでなく、他の文化団体との関連にもその慧眼をもつて牽引車になって来られました。とりわけ中国演劇界との交流を深くして力を尽くされました。

小生にとつて一番の思い出は新橋演舞場で上演した北條秀司作「信濃の一茶」に出演した時のことであります。今でも鮮明に思い出します。毎日毎日が楽しく、緒方拳さん、敏さん、僕と、三婆ならぬ三ジジイでもやろうかと話したことでした。

森塚敏さん、私達も協会のさらなる発展を目指して努力してまいります。これまでの暖かい友情を思い出に心から、心から感謝して、最後に中国の詩人、干武陵の詩「勸酒」を君に捧げ、読ませてくれ給え。

君この杯を受けてくれ

どうぞなみなみつがしておくれ

花に嵐のたえもあるぞ

さよならだけが人生だ

さよならだけが人生だ

敏さん、森塚敏さん、良き友敏さん、

どうぞ安らかに眠りたまえ。

たくさんの印象深い舞台と、常に私たちが「演劇鑑賞運動」を励まし続けてくださったことに深く感謝と敬意を申し上げます。ありがとうございました。

ありがとうございます。ゆつくりとおやすみ下さい。

弔辞

鈴木裕美

座長、青年座の劇団員でもないのに、座長は仇名だからと言って頂き、ずっと座長と呼ばせて頂きました。俳優座劇場プロデュース公演、「高き彼物」では本当にお世話になりました。あの時の座長には、毎回心から笑わせてもらいました。大好きな演技でした。

座長のお通夜の後、「高き彼物」のメンバーのマキノさんと、文学座の浅野君と、うちの劇団の歌川と、私、それから青年座の大家さんと宝仙寺の近くの居酒屋で飲み、ずっと座長の話をしていました。話をしていると皆、すぐ鼻が赤くなったり目が赤くなったり、泣きそうになるのですが、園を食いしはって泣かずに、ずっと笑いながら話し続けました。そうすることが座長にふさわしいと皆が思っていたし、座長が私たちのような関係性を作ってくれたかったと思います。その時マキノさんがおっしゃったのですが、青年座の座員の方たちは、座長にとって子供のようなのだから、怒られたり叱られたりしただろうけれど、俺たちはもう孫みたいなのだから、かわいがられる一方だったね、と。本当に座長

に叱られたことは一回もなくて、ただただかわいがって頂きました。本当にありがとうございました。と思っています。

また飲み屋の話で恐縮ですが、小竹向原での稽古の時、座長は養老之瀧とかはどのようにもお嫌いだったからその前を素通りして、少々お高い「樽見」という飲み屋でよく一緒に飲ませていただきました。私たちが稽古場でぐずぐずしているうちに、座長はさっさと先に樽見に行つて待っていてくださいました。樽見では面白いお話をたくさん聞かせていただきました。青年座という劇団名を決める時、俺は本当は竹の子座がいいと思つていて、今でも竹の子座の方がよかつたと思つているとか、あたしや四十過ぎまで親のすねをかじつていたから、お前たちも心配することはないとか、日本でシェイクスピアをやる演出家は、殆ど自分の演出プランを発表したいだけでやっているのいいけ好かないとか。後、ちよつとここでは言えないような面白いお話をいろいろ伺つて盛り上がりました。そして、「座長、まだいいじゃないですか、もつと飲みましよう」と言う私たちに、すつとお金を置いて、「じゃ、あたしはこれで」と先に帰られる。なんて去り際の綺麗な方なんだろう、私もそういうふうにお酒を飲めるようになったものだ、憧れ、尊敬していました。

そして告別式の時、それとまるで同じことを感じました。楽しく盛り上がって、皆まだ一緒に飲みたいし、いろいろ教えていただきたいのに、しゅつと綺麗に去つていった。告別式の後、座長が乗つていらつ

しやる車を見送りながら、樽見の前の通りから中野のご自宅に向かつてタクシーに乗られる座長を、「お疲れ様でした」「ご馳走様でした」とお見送りし、「あんなふうに生きたいやね」と浅野君たちと喋つていたことが重なりました。

座長、大好きでした。本当にかっこいい男の人だと心から思います。かわいがつて頂き、ありがとうございます。本当にお疲れ様でした。

弔辞

西田敏行

座長、西田敏行です。

このようなかたちで弔意を述べさせていただきますこと申し訳なく思います。今日はどうしてもはずせない仕事がございます。東京にはおりません。それでこういう録音というかたちをとらしていただきました。

在籍中三十三年間、本当に、本当にお世話になりました。ありがとうございます。話になりました。ありがとうございます。三十三年間の思い出を話せといつたら、もうどれだけの時間があつても、もう足りません。語りつくせません。ただ今思うことは、座長の慈愛に満ちた眼差しで、私が役者として成長していく様をつかすはなれず見て下さつていたという思いだけでございます。本当に、本当にありがとうございます。そのときにまあいずれ、私も参ります。そのときにゆつくりと、また改めて御礼を申し上げます。この劇団青年座に出会えたこと、そして森塚敏氏に会えたこと、自分の生涯の誇りであり、宝です。

ありがとうございます。

森塚敏略歴

一九二六年一月一日東京市下谷区坂本町（現・台東区根岸）に父忠吾、母元子の三男として生まれる。

桃園第三小学校、府立九中から一九四三年十二月一日海軍兵学校第七十五期入校。一九四五年十月二日仮卒業の証書を受ける。一九四六年三月慶応義塾大学国文科入学。この頃姉の影響で一九四七年九月当時役者を募集していた劇団俳優座入団試験を受け合格する。が一九四九年十一月に開始した劇団俳優座俳優養成所一期生に編入された。一九五〇年大学卒業。その二年後養成所を卒業し俳優座に再入座。

一九五四年五月、俳優座に所属する十人の役者により「劇団青年座」を結成。

十二月小説家椎名麟三の書き下ろし『第三の証言』をもつて旗揚げ公演とし、以後創作劇を追求し、渋谷、下北沢と拠点を替え、一九六八年有限会社劇団青年座代表取締役となる。翌年十一月に代々木八幡の地に「青年座劇場」を持つ本拠を構える。以来本公演のバックナンバーは一八四回を数え創立五二年の現在、(有)劇団青年座と青年座映画放送(株)を統括する青年座座長に就任。その間社団法人日本劇団協議会会長の要職を始め数々の公的な仕事にも就き活動を続けてきた。ところが今年四月に持病の胃潰瘍が悪化、入院療養を続けてきたのですが、六月十九日午後三時十四分中野の横畠外科胃腸科病院に於て肺気腫のため、逝去。享年七十九歳。

戒名 浄森院岳道修敏居士